

やぐらの埋葬と供養

—山王堂東谷やぐら群で発見された切石組基壇と経石をめぐって—

宍戸信悟・池田治・船場昌子*

はじめに

「やぐら」は中世鎌倉を特色付ける墳墓の一つであり、赤星直忠を始めてとする多くの先駆的研究が積み重ねられてきている⁽¹⁾。しかし、やぐらそのものは鎌倉特有のものではなく、房総半島にも多くのやぐらが分布していることが知られ、その他にも東北から九州までの各地で確認されている（田代1990・1997）。最近では、やぐらを中世の石窟遺構の一つとして認識し直す考え方（田代1993他）⁽²⁾や、墓を基にした（あるいは墓にもなる）供養空間として位置づける考えも示されている（河野1995）。一方、近年の調査ではやぐら内部の改変が早い段階から行われていることが明らかとなっていて、見かけ上やぐらとして認識されるもの総てを、単純にやぐらとして括ることは出来ないこともわかってきて（田畠1992）。一般的にやぐらの景観と言えば多数の石塔類が林立する状況を思い浮かべるが、実際には石塔類が並んだ状態で検出されることは極めて希なことであり、後世の改変によってはやぐらが中世の遺構であるとの認識すら薄らいでしまうというのが実状である。そのような中で、多宝寺跡やぐら群（同調査団1976・1977）や新善光寺跡やぐら群（原1983）などのようにやぐら群としての構成や内部での葬送儀礼を推定することが出来るような事例の発見が期待されていた。

筆者ら（宍戸・池田）は、今年（2001年）1月に鎌倉市大町3丁目に所在する山王堂東谷やぐら群の発掘調査を行った。そこでは、上下2段にわたってやぐら群が構築されていたが、確認された5基のうち下段の4基について調査をすることができた。やぐら内部には石塔類が残されていなかったが、玄室内や前庭部に切石を用いた施設が確認され、さらには写経石を伴った供養や追葬の状況が確認されるなど、やぐらの構造と葬送儀礼を知る上で重要な情報を得ることが出来た。詳細については既に報告書が刊行されている（池田・井辺2001）が、ここで確認された葬送や供養の様相は実に豊富な内容を持つものであり、短い整理期間と限定された頁数の中では意を尽くせたとは言えない部分がある。本論では、山王堂東谷やぐら群での様相を中心として、具体的にやぐらで何が行われていたのかを明らかにすると共に、やぐらの構造と供養について検討してみたいと考えている。

1. 山王堂東谷やぐら群の様相と年代

本やぐら群は鎌倉市大町3丁目に所在し、名越ヶ谷の奥、小さな支谷の丘陵裾に掘られている。急傾斜地崩壊対策工事に先立って発見され、平成11（1999）年と平成13（2001）年の2回発掘調査が実施された。平成11年の調査では玄室平面長方形の大形やぐら1基を調査した（鈴木2000）が、その後平成13年にはこれから約60m離れた地点で2段に構築されたやぐら5基と、その前面には岩盤を削平した造成面2ヶ所を発見した。両者は同じ小さな谷戸内にありながらも、別な支群として認識されるもので、今回取り上げるのは後者のやぐら群である。5基のうち全体を調査できたのは下段に並ぶ4基で、いずれも石塔類は残されていなかったが、火葬骨を主体とした埋葬が確認された。中でも注目されるのは1号及び3号やぐらである。やや長くなるが

先にその内容を紹介しておこう。

(1) 1号やぐらの様相

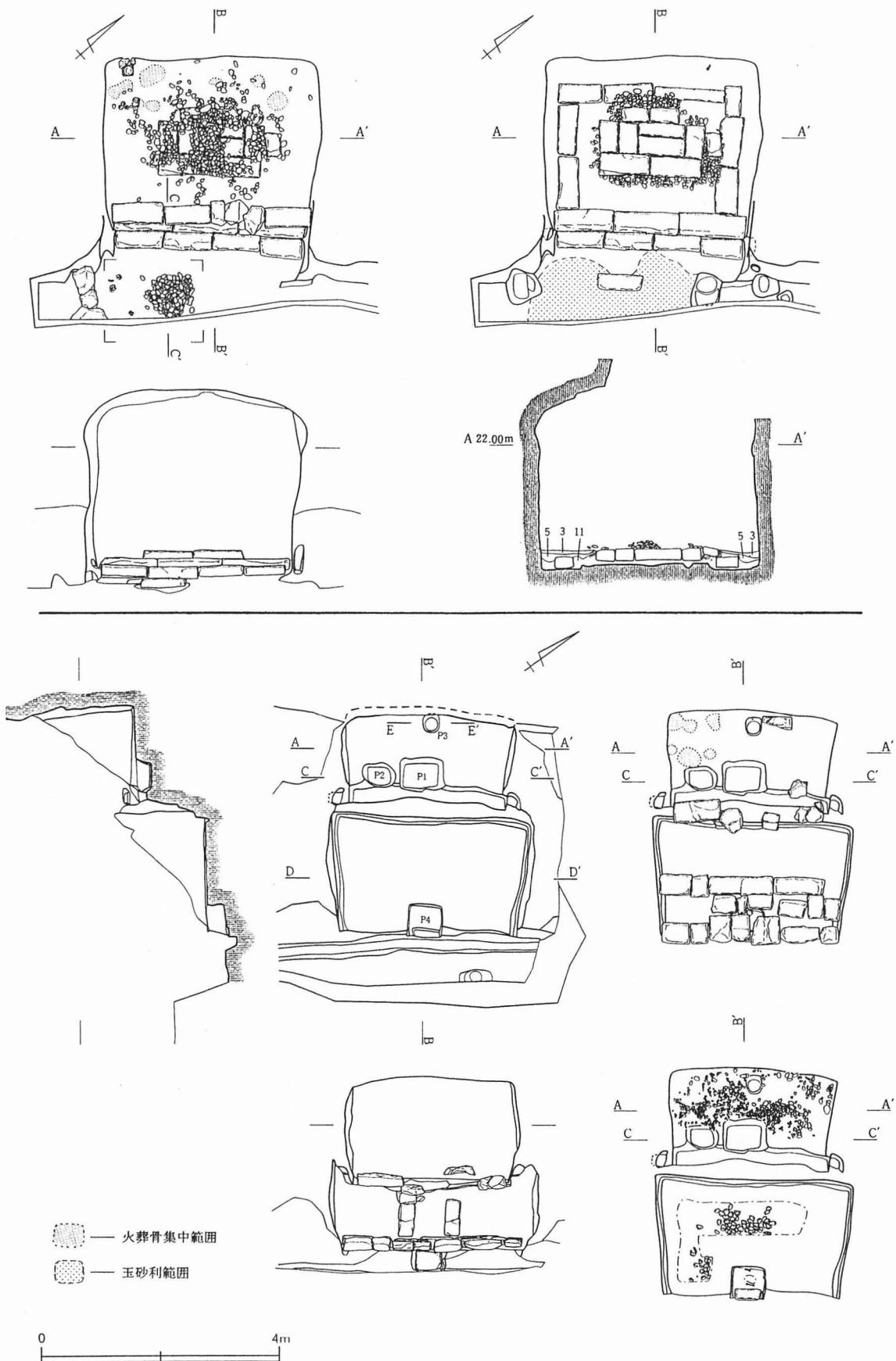
本やぐらは南東に向かって開口し、平面形態が横長の長方形を呈する玄室に、一段下がってほぼ同じ幅で奥行きの短い前庭部が設けられている。全長は3.75mで、玄室の幅は奥壁直下で3.45m、奥行きは2.95mを測る。奥壁の形状は家形を呈していて、奥壁中央で高さ2.8mである。天井は崩落していて、前庭部まで天井で覆われていたかどうかは不明である。玄室床面中央部には、直方体の切石（鎌倉石＝凝灰質砂岩、以下全て同じ）を9個用いた長方形の基壇が主軸と直交する方向に設けられていた。その規模は幅1.7m、奥行1.9m、高さ0.19mを測る。さらにこの基壇を取り巻くように合計11個の切石を用いて、外郭の囲いが設けられている。外郭の切石列は床面の岩盤を掘り込んで配置され、中央基壇よりも一段低く設置されている。前面を除いて、その他の辺は切石の大きさが一定していない。基壇の下部及び玄室内にも、納骨穴のような掘り込みはまったく認められなかった。外郭前面の切石は玄室前の段に合わせて配列され、一段下がった前庭部側にはこれに接して4個の切石が配列されて階段状を呈している。これとは別に、玄室先端の左右両側壁には前庭部切石列の上面とほぼ同じ高さに小穴が穿たれている。

前庭部は奥行き0.8m、幅3.2mで、床面は玄室床面より0.1m下がっていて、緩やかに傾斜しながら前面の造成面に続いている。中心よりやや外れた位置には切石1個体が岩盤を掘り込んで据えられていて、その周囲には玉砂利が敷かれていた。また基壇の上面から周囲にかけては炭化物を多量に含んだ焼土層が認められた。基壇外郭前面の切石列の上には焼土・炭化物層を挟んで15cm程上に再度切石が配列されていた。この切石列は基壇上面とほぼ同じ高さに作られている。これは火災後に玄室内を取り片づけて改めてやぐら内を整備したことを示すものである。

基壇の周囲と上部には径7～15cmの玉石が積み上げられていた。基壇上部には2ヶ所に玉石の空白部が認められ、この部分に石塔（五輪塔）が立てられていたものと推定される。しかし玄室床面では、何ら埋葬施設は確認されていない。基壇脇には瀬戸窯四耳壺の蔵骨器が置かれていて、奥壁際には火葬骨を納めた凝灰岩製小形五輪塔が立てられていた。また基壇周辺には火葬骨が11ヶ所埋納されていたが、これらも改修後に追葬されたものと判断される。さらには1号の外側に隣接する4号やぐらは火葬骨のみを埋納した小規模なものであり、これが1号やぐら内に入りきらない納骨を納めるための納骨施設と考えることも可能である。基壇の側面に積まれた玉石は焼土や炭化物層に覆われていた。さらに基壇の周辺からは多量のかわらけも出土しているが、その多くは正位に置かれて、供養のために供えられたものと推定された。前庭部の底面より0.9m上部で、径0.8m程の範囲に玉石が積み上げられた状態で検出された。これは玄室を区画する切石列最上段が埋まった時点に対応するもので、同じ土層面でやぐら入り口左端を区画するように岩盤塊を用いた配石が検出されているので、やぐらの存在を意識して積まれていると考えられる。この玄室内及び前庭部から出土した玉石には、経文や光明真言を墨書きで書写した経石（=礫石経）が含まれていたが、これについては後述する。

(2) 3号やぐらの様相

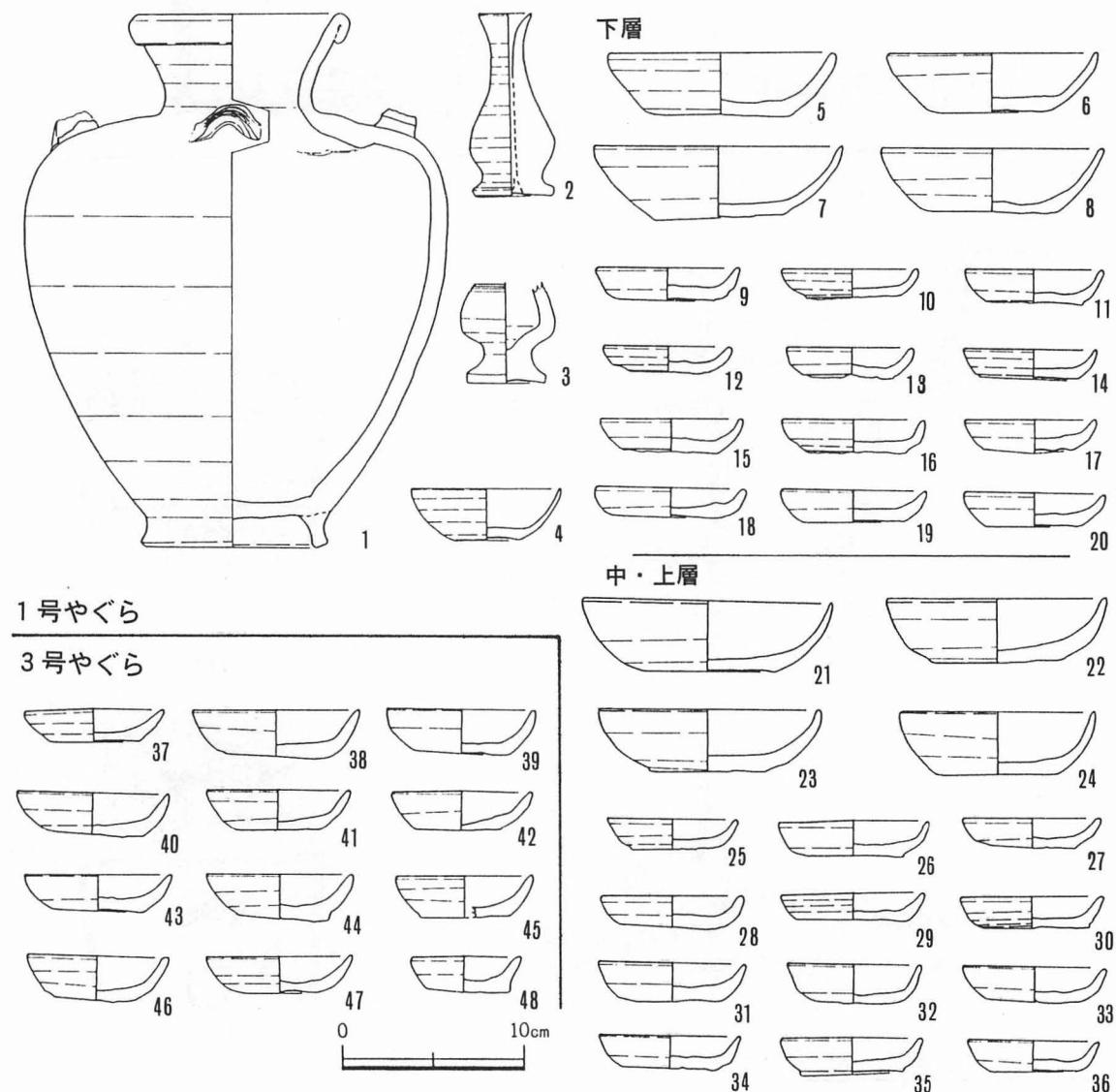
本やぐらは南東に開口している。玄室と前庭部で構成されるが、玄室と前庭部床面とは1.2mの比高差があり、さらに玄室よりも前庭部の規模が大きいため、別の遺構として造られた可能性もあるが、玄室前面から前庭部にかけての切石の落ち込み方などから、同時に存在していたことは間違いないものと思われる。玄室の平面形は横長の長方形を呈し、規模は奥行きが1.64m、最大幅は2.82mである。天井は全く残っていない



第1図 山王堂東谷やぐら群1号（上）・3号（下）やぐら（1/100）

が、奥壁で確認された天井部との境は、高さ1.7mである。玄室入り口先端は床面より8~14cmほど低くなっているが、その前面左側にはややずれた位置に切石が認められ、本来はここに切石が配列されていたものと考えられる。さらに玄室先端の左右両壁には横方向への掘り込みが認められるが、両者が向かい合う位置にあることから、この穴に横木を差し渡して、忌垣（玉垣）のような施設が作られていたと考えられる。なお、前庭部奥壁の中央部には玄室側からずり落ちたような状態で2本の切石が立った状態で検出された。左側の切石の上部には小さい切石が積まれていて、その上面は玄室前面の切石下部に接する位置にある。玄室床面には径5cm以下の小さな玉石が敷かれていた。その上部の特に玄室左側には多量の火葬骨が埋納されていたが、これを取り上げる過程で少なくとも6ヶ所の埋納が推定された。さらに玉石を除去すると、下部の岩盤面では奥壁寄り中央に1ヶ所納骨穴があり、入り口側の中央部と右側壁側に各1ヶ所方形の掘り込みが認められたが、これらには火葬骨は入れられてはいなかった。

前庭部の規模は奥行き2.03m、幅は奥側で3.3m、入り口側では2.97mと入り口側がやや狭い台形状を呈す



第2図 山王堂東谷やぐら群1・3号やぐら出土土器（1/4）

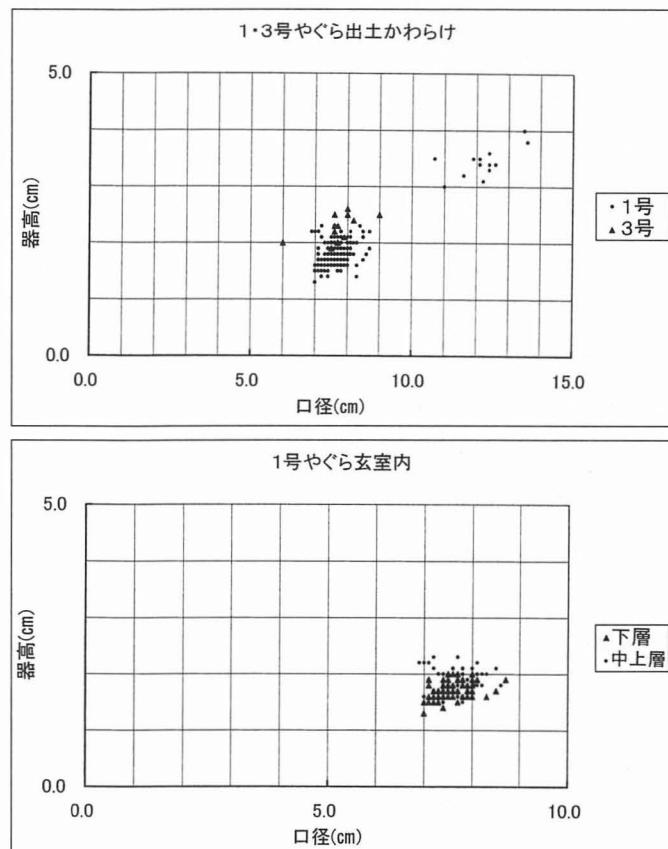
る。天井は当初より無かったと考えられ、奥壁及び両側壁の直下には周溝がめぐる。前庭部先端の中央には方形の掘り込みが認められたが、外側に面する部分は壁がなく、切石がはめ込まれていた。

前庭部の前面寄りには切石が敷き並べられていて、直方体のものと直方体の切石を切って立方体にしたものを組み合わせて、主軸に直交する方向に3列に並べられていた。なお一部には切石のない部分があり、整然とした状況とは言えない。切石が敷かれていらない範囲の下層には焼土混じりの炭層の広がりが認められ、特に床面中央付近に於いて厚く明瞭であった。焼土・炭層中には玉石、銅製品、鉄製品、かわらけ、炭化した木片に貼られた金箔等と共に火葬骨片や歯が出土していることから、この場所で火葬が行われたことが確認された。玉石も炭層範囲内から出土していてタール・ススが付着していた。特に3列目の奥側では寄せ集められたような状態でまとまっており、一部は切石に寄りかかっていた。玉石の一部には経文を書写した経石が認められている。

(3) やぐらの年代

次に1・3号やぐらの年代について触れておきたい。第2図1～4は1号やぐら玄室内から出土したものである。いずれも古瀬戸前期様式で、1は灰釉四耳壺で前II b期、2・3は灰釉仏華瓶で2は前II期、3は前III期、4は入れ子で前II期に相当する。1は基壇脇の玉石上面に乗せられていたもので、追葬と考えられる。2は奥壁直下の底面地下より出土したもので、3は焼土層と上層から出土したものが接合している。4は上層から出土した破片である。古瀬戸編年では前II期からIII期の間を1250年頃に置いている（藤沢1995）。

第2図右側には1号やぐらから出土したかわらけを、下層と中・上層に分けて代表的なものを示した。出土したかわらけは圧倒的に小形のものを主体としていて、中・大型ものは極く僅かである。手づくね成形のものは出土しておらず、いずれもロクロ成形である。大型のもののうち、下層の焼土層中から出土した5～8は、2次の被熱や黒化、器面剥離などが顕著に認められているため、火災を受けたことが明らかである。これに対して前庭上層から出土した21～24ものは一部の口唇部にススが認められるが被熱した痕跡は認められない。法量的にはややばらつきがあるため両者を分けることが出来ないが、後者はいわゆる「薄手丸深」と呼ばれる13世紀末～14世紀前半に特徴的な器形を示している。また前者は口縁部直下で屈曲して口唇部が内湾する形態を呈するもので、典型的な「薄手丸深」形態の初期段階に見られるものと考えられる。両者は層位的に前後関係を示しているが、厳密に出土位置を記



第3図 1・3号やぐらかわらけ法量比較表

録していないため、これを単純に認めるることはやや問題があろう。一方、小形かわらけは口径の大きなものは少なく、全体に径の小さなものが主体であり、やや新しい様相を示しているということは否定できない。しかし、第3図に示したように下層のものは法量的にはかなり限定した範囲に集中するのに対して、上層では器高がやや大きいものが認められる。

3号やぐらでは大形のものではなく小形かわらけのみが出土した。いずれも典型的な「薄手丸深」形態の小形でも器高の高いものあり、1号やぐら出土かわらけとの違いは明瞭である。

1号やぐらの年代を考える上で注目されるのは下層で確認された焼土層があげられる。遺跡名にも示されているように遺跡の西側に位置する谷は『吾妻鏡』に出てくる「名越山王堂」の推定地となっている⁽³⁾。本遺跡が「名越山王堂」に含まれるかどうかはともかく、『吾妻鏡』には13世紀中葉～後半にかけて「名越山王堂」にまで及ぶ3回の火災が記録されている。しかし、その最も新しいものでも弘化三（1263）年である。1号やぐらの焼土層をこれに対比した場合、瀬戸窯製品の生産年代には近いものの、かわらけの年代観とは合致しないことになるであろう。報告書では現行の主体的な編年観と瀬戸窯製品の年代を考慮して、1号やぐらを13世紀末～14世紀前半に、3号やぐらについては14世紀中葉という年代に位置づけた。

2. やぐらの構造と特質

1・3号やぐらにはいずれも切石を用いた基壇状の施設が見られたが、その構造には大きな差が認められた。ここでは、それぞれのやぐらの構造を推定して、その特質について考えてみたい。

1号やぐらでは、玄室内中央に切石を長方形状に組み合わせた基壇とそれを囲む外郭の切石列が基壇よりやや低く据えられて囲繞されていた。基壇と外郭の構造は玄室内全体におよんでいて、玄室底面にその他の納骨穴等の施設が認められないなどの理由から、この基壇は本やぐらの構築当初から意図された構造と考えられる。注目すべきは、基壇が外郭の切石列よりも一段高く設けられている点で、入り口側の切石列が改修された段階でも、基壇上面を大きく越えないように設置されている。さらに特徴的のは、基壇上及び基壇周辺には玉石（経石）が積み上げられていたことである。基壇上面玉石敷きの空白部分には石塔が造立されていたと推定したが、ここに立てられていたのは恐らく火葬骨を納めた五輪塔であろう。玄室前面は切石を2列に配して階段状の構造となっていた。さらに両側壁に掘られた穴には角材を差し渡して、忌垣（玉垣）状の区画施設を設けていたものと考えられた。本やぐら群では、2号・3号やぐらでも同様な穴が確認されている。垣をめぐらした区画施設は、中世墓地を描いた絵巻物にも描かれているものであるが、同じ様な施設としては新善光寺やぐら群の中央部コ字区画遺構で発見された「柵状の跡」があげられ、田代郁夫はこの柵状の施設を「門または鳥居」と「垣」であろうと考えられている（田代1992）。

1号やぐらの施設が区画施設であるという根拠は次の点にも示される。1号やぐらの前面には岩盤を削平した造成面が認められたが、報告書ではこの造成面に掘られたピットを建物の柱穴と考え、これがやぐらと密接な関係を有するものと推定した。ピットはやぐらの穿たれている切岸に接して配列され、やぐら入り口の両脇にもそれぞれピットが認められるなど、やぐらの存在を意識した状況が観察される。また、入り口右側のピットの1つは実際にはやぐらの前面にかかっているが、前庭部中央に据えられた切石はこのピットと左側ピットとのほぼ中間に位置している。また玉石敷きはこの二つのピットの間に広がっていた。つまりこの玉石敷きを造成面側からやぐら内部に至る通路と推定すると、玄室中央に据えられた切石がやぐらの主軸

からややすれた位置に据えられていることが説明できるのである。この様な推定が許されるとするならば、本やぐらは建物からの出入口施設によって、當時拝観することが可能であったわけである。玄室前面の施設はこの意味からも閉塞施設ではなく、開放的な区画施設でなければならないと考える。

また1号やぐらの基壇施設周辺の焼土・炭化物層は前庭部から前面の造成面にも広がりが認められ、やぐら前面の建物施設が火災にあったものと推定された。この火災を原因とする改修にあたっても、基壇前面を区画する切石列のみはほぼ同じ位置で復元されていた。またこの改修時か或いはその後に、前庭部では経石を集石状に積み上げる供養が行われていた。このように1号やぐらは本やぐら群の中でも中心的な位置にあるもので、特別な施設として管理修復されていた様子が窺われる。

3号やぐらでの前庭部で発見された切石敷きは、1号やぐらのような整然としたものではない。切石敷きの無い部分には、焼土混じりの炭層がほぼ全面に分布していて、この場で火葬が行われたことが分かっている。焼土の分布から切石敷きは火葬が行われた後に前庭部を片付けて構築したものと考えられた。玉石は2次的に集積された可能性が考えられるが、焼土や灰層は比較的純粋な形で残されていたため、火葬後やや間をおいて上に若干の土が堆積してからこれを掘り込んで切石列が設置されたものと推定される。従って切石列は構築当初のものではなく、火葬が行われた場に切石を敷き並べ基壇状の施設を構築したと見ることが出来るであろう。この切石敷きの上には石塔を建てていた可能性が高いが、その痕跡は認められなかった。ここで火葬された骨が玄室内に埋葬されたかどうかは不明である。しかし、火葬を行った場所に石塔を造立して墓所とする例は、中世の文献にも記録が認められるものであり、石塔のみではあるが多宝寺覺賢塔でも火葬後に石塔が建立されたことが確認されている（高端他1976）。なお、玄室内玉石上の火葬骨と共に経石1点が出土しているが、墨書が不鮮明なため判読不明であり、これが前庭部の経石と同時のものであるかどうかは判断できなかった。

やぐら本体の形態を見てみると、調査されたやぐらの中では3号やぐらがやや形態を異にするものの、他の3基はいずれも全体の形状が長方形を呈し前庭部を一段低く作るという特徴から、永井正憲が馬場ヶ谷やぐら群で行った型式分類（永井他1986）に比較するとⅡb型とされたものに相当する。馬場ヶ谷やぐら群では羨道を有するもの（I型）と、羨道を持たずに長方形平面もの（II型）が14世紀初頭から併せて営まれたとされている。また佐助二丁目の松谷寺やぐら群では13世紀後半～14世紀前半の遺物が出土しているが、比較的規模の大きなやぐらはいずれも羨道を有する形態である（宗臺他1998）。このようにやぐらの形態は群によつて構成を異にしていて、一元的な形態変化を示すものでないことは明らかである。その初期の段階から羨道をもつものや持たないものなど、幾つかの形態が存在していたと考えられる。既に指摘されているように、やぐら群及び個々のやぐらの形態は、それぞれの役割と密接な関係を有しているのであろう（田代1990）。

本やぐら群で見られた1・3号やぐらの様相から最も近いと考えられるのは、多宝寺跡やぐら群10号やぐらと新善光寺跡やぐら群のコ字区画遺構であろう。多宝寺跡10号やぐらは平面「L」字形を呈しているが、長方形平面の玄室の一方の側壁を拡張しているもので、前面には切石を配列している（学習院大学輔仁会史学部1966）⁽⁴⁾。この部分のみについてみれば、3号やぐらの前庭部切石敷きはこの10号やぐらの入り口部と同様にやぐら内部と外界を区画する意図を持つものという可能性も考えられる。一方、新善光寺跡コ字区画遺構については一般的なやぐらとは異なる遺構とされている（田代前掲）。天井構造を有していないというのが、その最も大きな理由と考えられる。確かに多宝寺覺賢塔（高端他1976）のように斜面下部を方形に掘り込んで、周囲に周溝を巡らした状況と類似したものといえる。しかし中・上段の遺構面と下段の遺構面を、それぞれ違

う遺構として分離して考えた場合、下段の遺構については本来天井があつてそれが崩落したものと考えられ、玄室内に五輪塔を建てその周囲には経石を積み上げてさらに垣をめぐらしたやぐらという認識が出来るのである⁽⁵⁾。元々軟弱な凝灰岩質の砂泥岩を利して掘られているやぐらは、その造営当初より断続的な崩落が続いたものと推定される。海底からの隆起した基盤層は隆起以前あるいは以後の多数の断層帯が内在しており、場所によっては驚くほどの亀裂が縦横に走っている。立木の根による浸食と切岸によって露出した岩盤面からの風化はさらにその剥落を進行させる。鎌倉市内のやぐらの総数が3,000～5,000基と推定されている（河野1995）が、それはやぐら群の多くが崩落土に覆われていて実数を掴みきれないからでもある。この遺構がやぐらとして造営されていたとしても、その特殊性は変わらない。周囲に分布するやぐらとの関係は、崩落後に配列される宝筐印塔群にも見られる様にここが特別な場所として意識されていたことを示している。前壁・羨道構造を持たない大形のやぐらは、前面に垣を作つて区画されていたものと推定され、折に触れるいは年忌毎に供養が行われる場として計画的に造営されたものであり、やぐら群内の中心的な位置にあつたものと考えられるのである。

3. 経石を伴う供養について

本やぐら群においては1号やぐら玄室内と前庭部の集石中、3号やぐら前庭部の合わせて3ヶ所より経石（礫石経）が出土している。やぐら内における経石の出土は、赤星直忠の研究により5ヶ所の出土例が報告され、初めてその存在が指摘された（赤星1957）。その後多宝寺址やぐら群・新善光寺やぐら群でも確認されたが、その出土事例は極めて少ないと見えよう。こういった状況の中で、本やぐら群の経石は、書写内容・書写方法が特定できるという点と、複数のやぐらから時期および書写内容の異なる経石が確認されているという点で、やぐらにおける礫石経の書写・埋納を考える上で貴重な事例と言える。

平安時代から見られる埋經には、礫石経以外に紙本経・瓦経・銅板経・滑石経等が用いられる。これらのうち、中世前半まで紙本経の埋經の中心となる「如法経」⁽⁶⁾の場合には書写の詳細な手順を記録した史料が多く残されているが、礫石経の場合にはそういった史料は確認されておらず、書写における全体的な手順は不明である。礫石経自体は近世に特に隆盛したことが知られているが、発掘資料の増加により、13世紀末から14世紀初頭にはすでに行われていたことが確認されている。中世段階での礫石経についての史料としては『平家物語』（「経嶋」⁽⁷⁾・応保元～3年營造）と『続史愚抄』（永享元年7月16日の条）（8）が知られており、その他石塔銘や願文に礫石経供養の記載が残るのみである（松原1994a）。

礫石経供養の過程については、一般の經典書写供養と同様に準備段階・書写・納經（埋經）供養の3段階に分けられるものと思われる。まず、これらの段階に沿つて本やぐら群出土の礫石経を検討してみよう。

（1）準備段階

礫石経の書写に当たっては、書写を行う石の採集が不可欠である。従来確認されている礫石経の多くは、「河原石」と総称される角の摩滅した扁平な礫が用いられており、山間部で採集したと考えられる角張った礫を用いた例はごく少数のみにとどまる。こういった礫が用いられる理由としては、書写を行うのに適したある程度扁平な礫を一括して多量に採集するのが可能であるという点がまず考えられる。1号やぐら玄室内出土の経石を例にとると、判読可能な経石の書写文字数は片面でおよそ30～110字程度であり、仮に法華経全てを連続して書写したとすると概算で310～1150点の石が必要となる。実際には経文以外の文言や光明真

言等が書写されている点を鑑みれば、石の必要数はさらに増加するため、多量の礫が必要となる⁽⁹⁾。本やぐら群においては、1号やぐら前庭部集石は凝灰質砂岩の礫を主体として採取地は不明であるが、1号やぐら玄室内の経石は相模川以西から小田原周辺、3号やぐら前庭部の経石は相模川東岸の茅ヶ崎周辺のいずれも海岸において採集された海浜礫ではないかとの指摘を受けた⁽¹⁰⁾。また、新善光寺跡内やぐら群コ字区画構造より出土した経石についても、早川・根府川・相模川などの相模湾沿いの河口周辺において採集されたものと確認されている（前掲）。

鎌倉一帯は「鎌倉石」と呼ばれる凝灰岩質砂岩を基盤層とする地域であり、やぐら自体も岩盤を掘り込んで構築されているため、河原石を運搬するよりも一帯で産出する石を用いることも十分に考えうるものである⁽¹¹⁾。しかし、こういった条件下にあっても遠方から運ばれた海浜礫が用いられていることには、河原石そのものを用いることに何らかの宗教的背景があると思われる。海岸の石は、扁平度が高く書写する面が広いこと、礫の表面の磨滅が進んでいるため墨が乗りやすいなどの利点が考えられる。また、海路をもって運搬すれば、多量の礫を一度に運搬できるということも考えられよう。これらの採取地が鎌倉より西方に位置するということも、西方淨土という見方から類推すると興味深い点である。河原石に書写することの意義については、石田茂作が「一字一石法華經」について「砂利は舍利に通ず。」としているように、河原石をあえて用いるという点の宗教的背景についてさらに検討していく必要性があろう（石田1930）。

（2）書写段階

石の採集後、經典の書写が行われる。書写にあたっては様々な仏教的儀礼が行われたと思われるが、実際には不明な点が多い。書写段階における具体的な供養の内容としては、石への書写方法・書写する手順・書写された内容の3つの点が問題となる。

石への書写方法については不明な部分が多い。これまで確認されているやぐら群出土の経石は10例（表1）であるが、いずれも石の各面に多字・多行の経文を書写したもので、いわゆる一字一石經は確認されていない。「一字一石」と「多字一石」とについては、いずれも石に經典を書写するという点では共通しているが、書写供養にあたっては、両者は明確に意識されて区別されていると考えられる。「多字一石」の場合、石への書写面順・書写方向は、石の平らな面を選んで一般的な写經と同様に右から左方向へ書き次いでいる。この傾向は中世以降の多字の事例にも多くみられる。ただし、1号やぐら玄室内出土の経石では、左から右方向への書写や、各面が連続性を持たないという特異な書写方法も確認されており、基準となる書写方法が存在したとは必ずしもいえない。またいずれも一行の文字数はまちまちである。書写方法については紙本經の書写方法をある程度踏襲しつつ、個々の石に合わせて臨機応変に書写を行ったといえるだろう。さらに、1号やぐら玄室内出土の経石では少なくとも二人以上の筆跡が確認されており、それぞれの筆跡で書写された部分が重複していないため複数による分担作業で行われたと考えられる。

書写されている内容においては、これまでやぐら出土例では法華經が多く確認されているが、3号やぐらでは無量壽經が書写されているため、赤星直忠が指摘するように法華經のみと限定することはできない（赤星前掲）。法華經は特定宗派に限定されず幅広く用いられる經典であり、鎌倉の寺院は諸宗兼学の傾向があることが指摘されている点も含め、宗派等による特徴を見出すことは極めて困難である。一方、中世墓研究においては、宗派等の影響はあまり見受けられず、形態的に全国的な共通性が指摘されている。やぐらにおける経石の埋納も、宗派による特質よりもむしろ供養に伴う埋經（納經）という側面を強く有するものであると考えられる。

(3) 納経供養

書写終了後、やぐら内に経石を納めるにあたっては、納経供養が行われたものと考えられる。本やぐら群において納経時の状況を留めているとみられるのは1号やぐら玄室内出土の経石である。1号やぐら玄室内においては切石によって基壇を構築し、経石は基壇上部を中心に周辺に広がるように集石状に展開しており、基壇中央には石塔が造立されていたとみられる。こういった状況により、経石は基壇上の石塔周辺に敷きつめられたものであり、基壇構築・石塔造立の後にそれほど時間をおかず経石が納められたと考えられる。基壇の周辺には多数のかわらけが出土しているが、納経に伴う供養に使用されたものが含まれている可能性がある。

かわらけの出土を除けば、同様の出土状況は多宝寺跡やぐら群10号・14号やぐらにおいてもみられる。特に10号やぐらにおいては、火葬骨を納めた五輪塔のうち最も古い形式を示す1基の下部を除いたやぐら内一面に経石が敷かれており、後にはこの経石上に別の石塔の造立が行われている。またやや状況が異なるが、新善光寺跡やぐら群コ字区画遺構においてはピットによって囲われた長方形の区画内に経石を積み上げている。この下部には火葬骨を納めた白磁四耳壺が埋納されたピットが発見されている。これらの事例においては「やぐら」の造成後に、火葬墓の造営あるいは石塔の造立に伴って経石が納められたと考えられる。こういった事例から、やぐらにみられる経石の書写供養が、葬送-特に造墓・造塔に伴う供養の一つであることが改めて確認できるものである。

また、山王堂東谷3号やぐらの前庭部においては、底面近くの焼土・炭化物層中から懸仏・飾り金具・鉄釘等や火葬骨片・歯と共に出土していることから、この場所で行われた火葬に伴うものと考えられている。出土状況から経石自体も火の中に投げ込まれた可能性が高いものである。

墳墓における埋経（納経）については、近年特に藤澤典彦によって中世墓の側面より研究がなされており、中世墓における埋経（納経）の事例には墓地の形成に先行して行われる例と造墓と共に行われる例があることが指摘されている（藤沢1991）。前者は、經典・經筒の出土は確認されていないが静岡県一の谷墳墓群（磐田市教委1993）や奈良県広瀬地蔵山墓地の事例に代表され、集団墓が造成されるにあたって先行して經典を埋納した、あるいは經典を埋納してあった場所の周辺が墓域として用いられるようになったとするものであり、12世紀末頃の年代が指摘されている。後者は単独の墳墓に対して行われる事例が確認されており、卒塔婆としての柿経や史料に見られる紙本経の事例が挙げられている。

14世紀代までの事例のうち、墳墓より発見された礫石経はやぐらを含めて18例が確認されている（表1）。墳墓以外の出土例では、塚より出土しているものが2例、柱穴内・基壇周溝内・庭園池中よりの出土が各1例である。出土事例があまり多くないという点をふまえても、墳墓・墓域に伴う事例が多いといえるだろう。

この中で火葬墓上に経石を敷いている事例としては、長野県坂城町觀音平經塚（若林1999）が挙げられる。ここは14~16世紀前半を中心に丘陵斜面にテラス状の墓域を形成する形で構築された中世墓地であり、経石は斜面裾部に近いテラス上、平均30cmほどの厚さに敷かれた玉石中より確認されている。テラス中央には火葬骨を納めた古瀬戸四耳壺を石組みの石郭状施設内に納めた墓壇が営まれ、東寄りに火葬骨片と焼土を覆土中に含む土坑を検出している。後者の土坑は火葬骨を骨蔵器に納めた後に、残りの火葬骨や焼土等を一括して埋めたものと思われ、両者を造営した後にテラス全面にわたって経石を敷きつめ、供養を行ったと推定される。経石の産地は特定されていないが、写真では全体的に扁平で角のやや取れた礫が中心である様に見受けられ、河原石を用いたものと考えられる。經典は法華経であるが、經典不明のものも確認されている。年

第1表 墳墓出土経石一覧

番号	名称	所在地	年代	出土位置	書写状況	經典	共伴遺物	文献
1	多宝寺跡やぐら群10号	鎌倉市扇ヶ谷2丁目	14世紀前半	やぐら玄室	全面、多行	判読不能。	古瀬戸瓶子(骨蔵器)	①
2	多宝寺跡やぐら群14号	鎌倉市扇ヶ谷2丁目		やぐら玄室	詳細不明			②
3	新善光寺跡やぐら群コ字区画遺構	鎌倉市材木座4丁目	14世紀中葉	床面中央、納骨穴上	全面、多行	法華經/四門真言(梵字)/阿弥陀三尊名	白磁四耳壺(骨蔵器)	③
4	山王堂東谷やぐら群1号	鎌倉市大町3丁目	13世紀末~14世紀初頭	やぐら玄室	全面を片面ずつ交互使用・多行	法華經/光明真言(梵字)	かわらけ、古瀬戸仏華瓶、古瀬戸四耳壺(骨蔵器)	④
5	山王堂東谷やぐら群1号	鎌倉市大町4丁目		やぐら前庭集石	全面、多行	不明	かわらけ	④
6	山王堂東谷やぐら群3号	鎌倉市大町4丁目		やぐら前庭玄室	全面、多行	無量寿經	かわらけ、瓦質香炉、銅製懸仏、金具類、鉄釘類、火葬骨片	④
7	まんだら堂やぐら群	鎌倉市大町4丁目	14世紀前半	やぐら内	全面、多行	法華經		⑤
8	名越山やぐら群17号	鎌倉市大町5丁目		やぐら内	全面、多行	法華經		⑤
9	葛原岡やぐら群	鎌倉市佐助2丁目		やぐら内	詳細不明			⑤
10	瑞泉寺裏山やぐら群	鎌倉市二階堂		やぐら内	詳細不明			⑤
11	釈迦堂奥やぐら群	鎌倉市二階堂		やぐら内	詳細不明			⑤
12	山寺廃寺	長野県大町市社	13世紀後半	集石墓 骨蔵器蓋	全面、多行	法華經	古瀬戸瓶子・四耳壺、青磁水注	⑥
13	觀音平	長野県埴科郡坂城町坂城 觀音平4355	13世紀~14世紀第1四半期	集石墓	全面、多行	法華經	和鏡、開元通宝、皇宋通宝、古瀬戸四耳壺	⑦
14	金剛寺多宝塔	大阪府河内長野市天野町	12世紀末~13世紀前半	多宝塔下、骨蔵器蓋 石・台石	全面、多行	宝篋印陀羅尼經(蓋石)・その他不明	かわらけ、瓦器碗、白磁小壺(骨蔵器)、須恵質甕、金銅製宝瓶	⑧
15	小児石	新潟県柏崎市両田尻	13~16世紀	土坑墓上	全面、多行	仏說阿彌陀經		⑨
16	大門山	宮城県名取市高館熊野堂	13世紀中葉~14世紀中葉	集石墓、集石	全面、多行	法華經 天台宗「札仏」・四弘誓願(願文か?)		⑩
17	木ノ内	千葉県香取郡小見川町木内		採集	詳細不明		火葬骨、常滑三筋壺	⑪
18	東照寺址	長野県諏訪郡下諏訪町高木	13世紀末~14世紀中葉	集石墓	多行	般若經		⑫

① 学習院大学輔仁会史学部 1966『中世墳墓「やぐら」の調査』

② 鎌倉市教育委員会 1976『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』

③ 新善光寺跡内やぐら発掘調査団 1988『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書』

④ (財) かながわ考古学財団 2001『山王堂東谷やぐら群』

⑤ 赤星直忠 1957『鎌倉の経塚』『考古学雑誌』42-4 日本考古学会

⑥ 大町市教育委員会 1987『長野県大町市遺跡詳細分布報告書 大町の遺跡』

⑦ 長野県埋蔵文化財センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2-1』

⑧ 国宝金剛寺塔婆及鐘樓修理事務所 1940『国宝金剛寺塔婆及鐘樓修理報告』

⑨ 柏崎市教育委員会 1991『小児石』

⑩ 名取市教育委員会 1988『大門山遺跡発掘調査報告書』

⑪ (財) 千葉県文化財センター 1980『千葉県文化財センター紀要』5

⑫ 下諏訪町教育委員会 1990『殿村・東照寺址遺跡』

代は、墓壙内に埋納された骨蔵器が12世紀後半の所産であり、経石の埋没後にテラスを再造成して造立された五輪塔群の年代が14世紀第2四半期に位置づけられる点より、13世紀以降14世紀第1四半期までが考えられる。経石を伴う墓はこの墓域の中でも最も古い時期に当たり、この墓を中心に背後の斜面地に墓域が展開している。ただし、経石を敷きつめた上面には石塔などを造立した痕跡は確認されておらず、経石を伴う墓域と背後の墓域や五輪塔群について直接的な関連性を考えるには不明な部分も多い。

一方、墓域よりやや離れた地点からの出土で、出土地自体が調査範囲外にあたるため遺構の状況が明確ではないが、宮城県名取市大門山遺跡(名取市教委1988)も同様の事例である可能性がある。13世紀中葉から

14世紀代を中心に営まれた板碑を伴う集石墓群であり、墓域内での如法経の埋納も確認されている。経石は如法経が納められたテラスより斜面下方において確認されていた扁平な礫の集中部において出土している。書写内容には法華経のほか、菩薩名を連記したものや偈の一部と思われる文字を記したものがある。さらに、名取地方においては法事の際に河原石に願意を記して墓に納める風習が存在していたことも指摘されており、墓地における礫石經供養を考える上で興味深い事例である。

また、横穴墓を転用して内部に経石を敷きつめた宮城県利府町道安寺横穴墓（利府町教委1978）の事例も、やぐらと同様な役割を考えることのできる事例である。道安寺横穴墓群では他に板碑を納めた横穴墓も確認されており、中世段階にはすでに開口して再利用されていたものと考えられる。経石はA区1号墳と呼ばれる横穴墓内床面に敷きつめられていた。石の産地等は特に比定されていないが、扁平で角の丸い石が使用されている。判読された書写内容から弘安6年（1283）の紀年銘と摩訶摩耶経の章題と本文が確認されている。

一方骨蔵器と共に経石を納める例としては、大阪府河内長野市金剛寺多宝塔（国宝金剛寺塔婆及鐘樓修理事務所1940）では基壇下より出土した須恵質の甕に火葬骨を納めた白磁小壺と、小礫に梵字數文字を墨書した経石や金銅製宝瓶等が納められていた。この甕は土坑内に台石として納められた経石上に据え置かれ、さらに上部に経石を蓋石として用いている。これらは塔の造立時のものか骨蔵器の追納段階の供養に伴うものである可能性が考えられる。経石は扁平で角の丸い石が用いられており、いずれも梵字で書写されているが蓋石のみ宝篋印陀羅尼経が判読されている。年代は12世紀末～13世紀前半に比定されている。また長野県大町市山寺廃寺跡（大町市教委1987）では、火葬骨を納めた古瀬戸瓶子を埋納した上部に1点のみ蓋石状に置かれていたとされる。石はやや扁平な角の丸い礫が用いられており、經典は法華経のうち不輕菩薩品が書写されているのが確認できる。遺構の状況は不明であるが、周辺から骨蔵器として用いられた古瀬戸瓶子・四耳壺等が出土している。年代は古瀬戸瓶子が13世紀後半の所産と見られる点から、13世紀末～14世紀代が想定される。同様の事例として長野県下諏訪町東照寺址遺跡（宮坂他1990）があり、13世紀末～14世紀中葉と考えられる集石墓群のうち、複数の集石墓より経石が出土しており、いずれも違う人物の筆跡によるものである。また、詳細は不明であるが、千葉県香取郡小見川町木ノ内遺跡（千葉県文化財センター1980）では火葬骨や常滑三筋壺と共に経石が出土している。

以上述べたように、墳墓における礫石經の出土例からは、墓あるいは墓域上に多数の経石を敷きつめる形で納める事例と、骨蔵器と共にごく少ないとされる事例が確認されている。山王堂東谷やぐら群の場合、1号やぐら玄室内出土の経石は前者と同様のものであると思われ、3号やぐら玄室内出土の1点は後者に属する可能性がある。また、1号やぐら前庭部で集石として検出している経石はこれらに対して追善供養として書写されたものであろう。3号やぐら前庭部出土の経石に関しては、同様に経石を火葬の際に投入したと考えられる事例は確認されていないが、死者の靈魂を鎮魂・浄化させて極楽往生させるための葬送儀礼であろう。

4.まとめ

これまで長々と述べてきたが、1号やぐらでの造営から廃絶までの様相は下記のように整理できる。

やぐら掘削	→	基壇の造営・石塔の造立	→	火災による改修	→	火葬骨追葬	→	機能喪失
経石納入供養				改修供養（集石）		納骨供養		人骨投げ込み

一方、3号やぐらでは玄室と前庭部が同時に存在していたとするに次のように整理できるであろう。

やぐら掘削	→	前庭部で火葬	→	基壇設置・石塔の造立	→	火葬骨追葬	→	機能喪失
葬送供養（経石）				(玄室内埋葬?)		納骨供養		

それぞれに経石を用いた供養が行われているが、経石については先にあげた例以外にも13~14世紀代の塚（経塚）に伴う例が近年各地で発見されている。やぐらにおける経石の埋納も、この様な流れの中でやぐら内における造塔供養や追善供養の一部として導入されたものと考えられる。経塚や墳墓での出土例ではそれぞれ多様な様相を示しているため、特定の宗派に限定されるものではないが、浄土宗や念佛衆との関係が指摘されている。やぐらで行われた供養には、様々な宗派あるいはそれを兼ね備えた人々が参画して営まれていたことを示しているものと思われる。

本遺跡で認められたやぐら内部における基壇の造営や造塔供養は、多宝寺跡の中央平場で発見された石造遺構のように、本来平地墳墓や墳墓堂にみられる様式を取り入れたものと考えられる。またやぐら前面に建物が存在することは既に上行寺東やぐら群（戸田・小林1985）で確認されて以来、その他のやぐら群でもその存在が推定されるようになって来ている。本遺跡の1号やぐらでは両者が一体になった墳墓堂もしくは供養堂として計画的に構築されたものと考えることが出来る。そしてその造営時期は、出土したかわらけなどから13世紀末から14世紀初頭には確實に存在していたのである。

やぐらと墳墓堂・供養堂との関係は、やぐらの発生と絡めて既に多くの指摘がなされてきている。赤星直忠は鎌倉に群集した武士達が丘陵に開口する横穴に納骨したことがやぐらの発生を促した可能性があるとして、武士達の仲間に急激にこの風習が広まり、その納骨窟を墳墓堂として莊嚴したとする。このようにして鎌倉中至る所に営まれていったが、鎌倉市中に墳墓を営むことの禁令⁽¹²⁾が出されたことから、墳墓は鎌倉を取り巻く丘陵の尾根をめぐって群集するに至ったとされている（赤星1959）。これに対して大三輪龍彦は、禁令が禁止の対象としたのは平地の墓所についてであり、鎌倉の都市整備の大きな障害となったので平地部分の確保を目的に禁令が発せられ、これによって周囲の丘陵にやぐらという新しい形の墳墓を作つて改葬されたため急激にやぐらの発展を促したとした上で、このことからやぐら発生の年代は仁治3年（1242）頃と言わざるを得ないとされた。さらには北条氏と律宗の結びつきから、北条氏による鎌倉の都市整備と仁治の禁令によって、木造墳墓堂の代用として土木技術を持つ律宗僧侶達が生み出した墳墓の新様式がやぐらであるとしている（大三輪1976）。仁治の禁令に関しては、やぐら出土の紀年銘資料と年代差が指摘されている。しかしこの法令は豊後守護大友氏が所領の府中に発したものであるが、法令自体も幕府法の影響下に作られたものであろうから、鎌倉市中でも既に同様な禁令が出されていたという考えも示されている（石井1979）。一方、田代郁夫は鎌倉に集中した御家人達が鎌倉に彼らの墳墓を集中させたという考え方を呈している。始めは僧侶階級の墓制の一つであった「やぐら」が、檀越である北条氏一門や有力御家人達が帰依した僧侶の墓所の傍らに自らの墓所=やぐらを築かせて分骨を納めさせ、一方地方に父祖伝來の墓所を持つ一般御家人にあっても、分骨をもつて鎌倉で帰依した高僧の墓所の傍らに葬られることが出来たとする。そしてやぐらの中には、ある時期いわゆる納骨信仰の場として靈場化するものがあると指摘している（田代1990）。またやぐらから出土した骨蔵器等を分析した田代は、骨蔵器は瀬戸・常滑共に概ね13世紀中頃から14世紀中頃にかけての年代が与えられるとした上で、これらの埋納状況からは石窟（=やぐら）の造営と骨蔵器の埋納が一体の行為であったと推定し、まさにこの時期が骨蔵器と骨蔵施設を設けた石窟が発生し展開した中心時期であるとしている（田代1998）。

やぐらから出土している蔵骨器は、1号やぐら出土の四耳壺のように古瀬戸前期様式の13世紀前半代のものが認められるが、板碑等の紀年銘資料では朝比奈峠やぐら出土の弘安九年（1286）銘を最古とする。形態的には、近年調査されたやぐら群の様相から見ると、既に13世紀末の段階から前壁構造をもつものと持たないものの両方が存在したものと予想される。また玄室内の構造については、多くの納骨穴を周囲に配列するものではなく、特定の納骨穴もしくは納骨器としての石塔を中央部に設置したもので、その周囲に追善供養としての造塔や追葬としての納骨あるいは造塔がなされたものと考えることができるであろう。そしてその被葬者（納骨あるいは供養された人々）は、寺院の僧侶及び檀家である有力御家人であったろう。ここで明確に示すことは出来ないが、やぐらは初期の段階からかなり確立した構造として構築されたと考えられる。軟質な凝灰質砂岩である鎌倉の丘陵部とはいえ、企画性をもったやぐらの掘削には高度な技術が必要とされたはずであり、それには「土木技術を持つ律僧集団」が関わった可能性は高い。しかし、実際のやぐらの構造や形態の検討から示されたわけではないので、この方面での検討が必要であろう。

1号やぐらの基壇構造が平地墳墓の形をやぐら内に取り入れられたものとしたが、石塔や蔵骨器などの供養・納骨方法そのものだけでなく、中心的なやぐらを取り巻くように造営されるやぐら群は中世的な墳墓の在り方を丘陵斜面を掘り込んだ横穴の中に入れ込んだものという見方が出来るわけで、大三輪の考え方はこの点において正しいと言えるだろう。しかし、鎌倉市内においては、やぐらに先行する形での墳墓の在り方は、まだ明らかになってはいない。13世紀代における墳墓の在り方とやぐらの発生に関しては、さらに多方面からの検討が必要とされよう。やぐらは僧侶を中心とする特別な階層の特権的な墓制として成立したものと思われる。田代はやぐら発生の原因を「南宋仏教文化の影響」とするが、中国仏教文化の影響は考慮すべきだが、具体的にやぐらの形態や内部構造の比較によって示されない限りは受け入れにくいと考える。

1号やぐらにおける経石を伴う供養は、基壇上に建立されていたであろう石塔内に納められていた火葬骨（舍利）の鎮魂と死穢を浄化するとともに、石塔周辺を含めたやぐら内を聖地化させる（松原1995）ことを意図したものと考えができる。本来死穢を厭う寺院境内に墓地を造営するために様々な仏教的儀礼を経なければならなかったと思われるが、逆にこれらの儀礼を利用してやぐら内を聖地化させ、さらには寺院内部を聖地・靈場化させたのではないのか。それが多くの寺院が集中する鎌倉において、有力御家人のみならず一般御家人や台頭する商人達をも壇家として、またやぐらへの被葬者（納骨者）として取り込んでいく手段であったのではないだろうか。その結果が、「14世紀中葉から後半以降に追加される小型化した石塔や瀬戸・常滑製の骨蔵器を用いない分骨」（田代1998）による納骨が盛行することにつながっていくのである。

おわりに

山王堂東谷やぐら群の検討を通じて、やぐらの性格の一端を示すことが出来たのではないかと考えている。やぐらの変化と再利用については、最近次第に明らかにされつつあるが、個々のやぐらでの葬送・供養、あるいは形態的な差異などまだ不明な部分が多い。またやぐらの成立と展開については、鎌倉の政治・社会的な背景を抜きにしては語れないが、今回はあえてその部分を抜きにしてまとめた。勉強不足な部分が多くあると思われるが、御批判・御指導いただければ幸いである。

本稿の執筆は、はじめにと1を池田が、4を船場が、その他を宍戸が担当した。

また本稿を作成するにあたっては、坂詰秀一、関秀夫、大三輪龍彦、池上悟、小川裕久、榎淵規彰、小林康幸、宗臺富貴子、鈴木庸一郎の各氏に御教示を頂いた記して感謝申しあげたい。

註

- (1) 赤星直忠による研究史は田代1997に詳しい。
- (2) やぐらを「石窟遺構」として総合的に考えようとする視点は、十分理解され傾聴に値するものであるが、「石窟遺構」という名称についてはさらに曖昧な印象を拭いきれない。混乱をさける為にもある程度共通した認識として受け入れられている「やぐら」という呼称を使うことにする。
- (3) 山王堂東谷やぐら群は衣張山から派生する丘陵の一角に立地し、周辺には釈迦堂口やぐら群・釈迦堂奥やぐら群を始め多数のやぐら群が集中して分布する地域の一つとされている。本遺跡の所在する小支谷は南に広がる名越谷の一部でもあり、調査地東側の谷奥には北条時政の別邸があったとされていて、その後は名越北条氏の拠点であったとも言われている。一方本遺跡の西側に位置する谷は『吾妻鏡』にも見られる「名越山王堂」の推定地である。赤星直忠等による『鎌倉史蹟巡り會踏査記録(二)』によれば山王堂の東側の谷を「赤門」と呼ぶという記述があり、地元の方にも同様な話を伺うことが出来た。本やぐら群での様相は、やぐらの前面に推定される遺構との密接な関連性を窺わせるものであった。本やぐら群を含めた谷奥全体に寺院址が存在することはほぼ間違いないものと思われる。それは「名越山王堂」の一部であるか、あるいは名越北条氏に関連するものと推定することも可能であろう。
- (4) 多宝寺跡10号やぐらでは前面側に鎌倉石の切石が5列に配列されていることが図示されているが、これに関する説明がないため、詳細は不明である。
- (5) 報告書に示された実測図では左奥壁の立ち上がりに屈曲が認められる。また、両側壁上部は直線的に表現されていて、上面にテラス面が存在したのではないか。
- (6) 特定の作法にのっとって経典を書写する供養、または書写された経典そのものをも指す。日本では慈覚大師円仁により始められた天台宗における法華經の如法経が知られ、後円仁の書写した如法経を法滅に備えて土中へ埋納したことより、埋經まで含めた儀礼となる。経筒銘に多く如法経の文字が残り、中世前半までの紙本経の埋經の主流となる。
- (7) 平清盛により摂津国輪田泊に築かれた島。応保元(1161)年築造を開始したが、台風により崩壊したため応保3(1163)年再築され、その際に人柱の替わりに石の面に一切経を書写したもの用いて築いた。後に、清盛の遺骨をこの島に納めたとする。
- (8) 江戸中期の公卿柳原紀光が編集した歴史書。正元元(1259)年龜山天皇から安永8(1779)年後桃園天皇まで521年にわたる。諸家の記録、社寺の旧記などを参照して編まれ、天皇の日常生活、朝廷日々の行事、神事仏事などを記し、各条に出典を付している。永享元年(1429)七月十六日の条に「奉為先帝公卿殿上人等向西院邊書一石一字法華經云」とみえる。
- (9) 墓書の確認できないものも含めると、1号やぐら玄室内では1,426個の礫が出土している。1号の前庭部では209個、3号やぐら前庭部では100個を数える。
- (10) 松島義章氏の御教示による。報告書では縄文時代の石器が含まれていたことから河川の河床礫と考えていたが、礫の扁平度ではいずれも平均値0.6を示すことから海浜礫と考えられることを確認した。
- (11) 鎌倉石では規格的な切石のみならず、多くの五輪塔が製作されていて、やぐらの造営を含めて専門的な工人の存在が推定される。
- (12) 新御成敗状(仁治三年正月十五日)「府中墓所之事」。

引用・参考文献

- 朝日新聞社 2000「仏教がわかる」『A E R A M o o k』56
- 赤星直忠 1957「鎌倉の経塚」『考古学雑誌』第42巻4号(有隣堂『中世考古学の研究』1980所収)
- 赤星直忠 1959「やぐら—鎌倉における中世墳墓の様式—」『鎌倉市史考古編』吉川弘文館
- 網野善彦・石井進編 1988『中世の都市と墳墓』日本エディタースクール出版部
- 池田治・井辺一徳 2001「山王堂東谷やぐら群」『かながわ考古学財団調査報告』117
- 石井 進 1979「中世都市鎌倉研究のために一大三輪龍彦氏の近業によせてー」『三浦古文化』第26号
- 石井 進・萩原三雄編 1993『中世社会と墳墓』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集』名著出版
- 石田茂作 1930「我国における法華經書寫の技巧に就いて」『清水龍山先生古稀記念論文集』(思文閣出版『佛教考古學論攷三經典編』1977所収)
- 大三輪龍彦 1976『かまくらのやぐらーもののふの浄土ー』かまくら春秋社
- 大町市教育委員会 1987『長野県大町市遺跡詳細分布報告書 大町の遺跡』
- 学習院大学輔仁会史学部 1962『多宝寺址やぐら発掘調査概報』
- 学習院大学輔仁会史学部 1966『中世墳墓「やぐら」の調査—鎌倉市、多宝寺址、東林寺址、東御門ー』
- 河野眞知郎 1995『中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都』講談社現代新書メチエ49
- 国宝金剛寺塔婆及鐘楼修理事務所 1940『国宝金剛寺塔婆及鐘楼修理報告』
- 小林康幸 1999「鎌倉永福寺経塚の造営に関する一考察」『考古学論究』第6号 立正大学考古学会
- 斎木秀雄 1990『名越・山王堂跡発掘調査報告書』山王堂跡発掘調査団

- 斎藤 忠 1993「中世の火葬墳墓と一ノ谷中世墳墓群遺跡」『一ノ谷中世墳墓群遺跡』磐田市教育委員会
- 品田高志 1994「越後の中世墳墓・墓地」『第7回北陸中世土器研究会 中世北陸の寺院と墓地』北陸中世土器研究会
- 宗臺秀明 1992「中世、14世紀かわらけの変遷」『考古論叢神奈河』第1集 神奈川県考古学会
- 宗臺秀明 1999「正法寺遺跡」『東国歴史考古学研究所報告第22集中世石窟遺構の調査Ⅲ』東国歴史考古学研究所
- 宗臺秀明・宗臺富貴子 1998「松谷寺跡内やぐら」『東国歴史考古学研究所報告第15集中世石窟遺構の調査Ⅱ』東国歴史考古学研究所
- 鈴木庸一郎 2000「鎌倉城（大町3丁目）所在やぐら」『かながわ考古学財団調査報告』89
- 高端政雄他 1976『重要文化財淨光明寺五輪塔修理工事報告書』淨光明寺
- 田代郁夫 1990「II. 総括—中世鎌倉におけるやぐらの存在形態とその意義」『昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業にともなう発掘調査報告書』
- 田代郁夫 1993「鎌倉の「やぐら」—中世葬送・墓制史上における位置付けー」『中世社会と墳墓 帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集』名著出版
- 田代郁夫 1995「鎌倉の「やぐら」」『シンポジウム・やぐら～中世びとの浄土～発表資料』
- 田代郁夫 1997「赤星直忠博士による「やぐら」の研究—研究略史ー」『鎌倉』84
- 田代郁夫 1998「中世石窟「やぐら」の盛期と質的転換」『考古論叢神奈河』第7集
- 田畠佐和子 1991「やぐらの研究（1）—鎌倉における分布と出土遺物についてー」『中世都市研究』第1号 中世都市研究会
- 田畠佐和子 1992「やぐらの研究（2）やぐら内に掘られた摺鉢状ピットについて—無量寺やぐらの調査事例を中心としてー」『中世都市研究』第2号 中世都市研究会
- 多宝律寺遺跡発掘調査団 1976『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 多宝律寺遺跡発掘調査団 1977『多宝律寺遺跡第7次発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 玉林美男 1986「鎌倉の葬制」『仏教芸術』164号 毎日新聞社
- 千々和 到 1991「中世の墓と石塔をめぐって」『争点日本の歴史4 中世編』新人物往来社
- 千々和 到 1994「特論石の文化」『講座日本通史』9 岩波書店
- 千葉県文化財センター 1980『千葉県文化財センター紀要5 考古学から見た房総文化の解明 歴史時代』
- 継 実 1991「佐助ヶ谷遺跡内やぐら」『平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業にともなう発掘調査報告書—佐助ヶ谷遺跡内やぐら、弁ヶ谷遺跡内やぐら、公方屋敷内やぐら、瑞泉寺周辺遺跡内やぐら』同発掘調査団
- 手塚直樹他 1989『淨妙寺釈迦堂ヶ谷遺跡』淨妙寺釈迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団
- 戸田哲也・小林義典 1985「上行寺東やぐら群の調査」『第9回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』
- 永井正憲 1986「馬場ヶ谷やぐら群にみられるやぐらの型式について」『馬場ヶ谷やぐら群発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 名取市教育委員会 1988『大門山遺跡発掘調査報告書』
- 原 廣志 1983『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書—中世墓の発掘調査—昭和62年度鎌倉市材木座地区内急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査』新善光寺跡内やぐら発掘調査団
- 日野一郎 1975「墳墓堂」『新版仏教考古学講座第七巻墳墓』雄山閣
- 藤沢典彦 1988「日本の納骨信仰」『仏教民俗学大系4 祖先祭祀と葬墓』名著出版
- 藤沢典彦 1990「墓地景観の変遷と背景」『日本史研究』第330号
- 藤沢典彦 1991「墓上祭祀の諸問題」『歴史手帳』第19巻1号
- 藤沢良祐 1995「瀬戸古窯址群III—古瀬戸前期様式の編年ー」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3輯
- 船場昌子 2001「山王堂東谷やぐら群出土の礫石経」『かながわ考古学財団調査報告117山王堂東谷やぐら群』
- 松尾剛次 1995『鎌倉新仏教の誕生 効進・汚れ・破戒の中世』講談社現代新書
- 松原典明 1994a「礫石経研究序説」『考古学論究』第3号 立正大学考古学研究会
- 松原典明 1994b「礫石経の地域相—3関東甲信越」『考古学論究』第3号 立正大学考古学研究会
- 松原典明 1995「礫石経の諸相—特に中世墓の出土例をめぐってー」『立正考古』第33号 立正大学考古学会
- 宮坂光昭他 1990『殿村・東照寺址遺跡』下諏訪町教育委員会
- 山川公見子 1999「経塚造営の作法とその用具—埋經作法の行儀書に見られる用具ー」『考古学論究』第6号 立正大学考古学会
- 吉田 清 1993「如法経会」『仏教民俗学体系1 仏教民俗学の諸問題』名著出版
- 利府町教育委員会 1978『菅谷道安寺横穴群』
- 若林 卓 1999「觀音平経塚」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書41上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21』